

元島民のエピソード（忘れてはいけない、モノがたり展より）

お爺さんのどんざとキセル
多楽島出身の東狐 貢さん

東狐貢さん一家は多楽島フルベツに住んでいました。

お爺さんの与三松さん、お婆さんのスマさんの代に、富山県から島に開拓に来たそうです。お父さんは松太郎さん、お母さんは松枝さん、貢さんのきょうだいも弟さんが一人、妹さんが三人の九人家族でした。貢さんは十四歳まで島にいましたが、実家は主にコンブを採って生活をしていました。

貢さんによると、昭和二十年十月頃には、すでに近所の方は島から大方脱出しており、東狐さん一家は何回かに分かれて根室に脱出しましたが、最後まで島に残っていたお爺さんとお婆さん、そして貢さんの三人は、お父さんが所有していた機械船に乗って、薄暗くなる夕方に脱出してきたとのこと。

このどんざは、お爺さんが富山県から島に開拓に来た時に着てきたもので、今から百年以上前のものです。貢さんはお爺さんがこのどんざを着て仕事をしている姿をよく覚えていているとのこと。

また、タバコが大好きだったお爺さんが、きざみタバコを吸っている姿も記憶に残っています。

毎年一月に行われる多楽島の総会では、このどんざを着て替え歌や島引きを披露しています。コンブの匂いや島の空気の染み混んだ、このどんざを皆に見てもらいたいという思いからだそうですが、会のメンバーからは「百年以上も経つんならコンブの匂いがしみ込んでいると思うから、匂いをかがせてちょうだい」とおっしゃる方もいたそうです。



お父さんの懐中時計

色丹島出身の得能 宏さん

得能宏さん一家は色丹島斜古丹に住み、お父さんの源治さん、お母さんのハツさん、宏さんを含めたきょうだい六人とお爺さんの九人家族でした。宏さんは終戦当時小学校五年生でした。

この懐中時計は、軍人だったお父さんが腰に長刀をさげ軍服の内ポケットに入れていたそうで、身長が百七十センチメートル以上あったというお父さんが、内ポケットから懐中時計を出して見ている姿が、子供ながらにすごく格好良く見えたそうです。



今から百年から百二十年前に作られたもののように、お爺さんが買ってお父さんに引き継いだものかもしれないということです。

この懐中時計はロンジン製の精巧な物ですが、古いもので壊れやすく、ねじを巻かないとすぐに止まってしまいうです。宏さんは壊れる度に修理をして大切にしてきたので、現在もしっかりと時を刻んでいます。



宏さんは、昭和二十二年九月に樺太の真岡を経由して引き揚げてきました。お母さんがこの懐中時計を大切にしまつて島から持ち出して来たそうです。あまりに大切にしまつてあったので、宏さんが高校生になるまで、存在に気がつかなかったそうです。

現在は、宏さんがお父さんの思い出の品として保管していますが、今後は十九歳のお孫さんに得能家の歴史と共に引き継ぐ予定とのこと。

お兄さんの通帳

〽 択捉島出身の上松 健吾さん 〽

この通帳は、健吾さんのお兄さんで長男の定一さんが平成二十五年に亡くなられた際、遺品を整理していたときに出てきたものです。これはお兄さんで四男の信三さんの通帳で、昭和二十年三月に島の郵便局で記帳されており、終戦時まで島にあったものと思われまます。

信三さんは、昭和十七年頃に志願兵として海軍に入り生きて帰ってくることはできませんでした。病気になる音更の病院に入院していたため、引き揚げてきた健吾さん達よりも先に北海道に戻っていたそうです。この通帳は、信三さんを心配したお父さんが用意していたもので、引き揚げ時に父親が持ち出したのではないかと健吾さんは考えています。

また、遺品の中には、通帳の他に旧紙幣などを整理した冊子もあり、長男の定一さんは昔の物を大切にされた方だとうかがわれます。



上松健吾さんは、択捉島の年萌で五男として生まれました。きょうだいは健吾さんを含め十二人おり、健吾さんは九番目でした。家業はタラ漁をしており、春にはノリを取っていたそうです。日本水産の捕鯨会社でも働き、春から秋にかけては鯨の臓物を買って肥料として加工し、十月ぐらいに加工の仕事が終わるとまた漁に戻っていたそうです。

昭和二十二年八月に引き揚げられるまでの二年間ロシア人と一緒に生活していました。

年萌では、侵攻時、ソ連軍が来るといっ情報が入り、学校でロシア人と会った帽子を取ってあいつをするようにと言われたり、家の前にトラックに乗ったソ連軍がやってきて、部屋に勝手に入り時計や万年筆を持って行ったそうです。

健吾さんの家は大きく、ソ連軍の将校クラスの家と家の半分くらいの間仕切りして一緒に暮らし、良い人達で上手くお付き合いできたそうです。

財産を書き写した布

〽 択捉島出身の山田 勇さん 〽



この白い布は、戦時中に配給で受け取った布に当時の通帳の金額や証券の番号を記したものです。お父さんの吉次郎さんがソ連人に財産を奪われないように、また、所有している財産を忘れないために書き記しておこうと思ったもののだそうです。吉次郎さんは高校・大学に行っていないため、読み書きが苦手でした。そこで強制移住で内保に集められたときに知り合った内保小学校の校長先生に書いてもらったそうです。吉次郎さんは、択捉島を離れるときにソ連兵に見つかり取り上げられることを心配し、腰に巻いてこの布を持ち出したとのこと。

この白い布で財産が戻ることはありませんでした。ただ、吉次郎さんが宝物のように大切にしていたことを勇さんは知っていたため、吉次郎さんが亡くなった際に遺品として引継ぎ、同じように大切にしていられました。

その後、皆さんの記憶にも残るようにといい思いから、千島連盟に寄付されました。

「※山田勇さんについては、建築・旧千島電信回線（海底ケーブル）ハツタリ浜陸揚庫の頁で紹介しています」



お父さんの木挽（こびき）

〱 択捉島出身の伊藤 光作さん 〱

伊藤光作さん一家は択捉島のビョーノツに、お父さんの五郎さん、お母さんのキノエさん、次男の光作さんを含め五人のきょうだいの七人家族で住み、家業はノリ採りの漁師でした。他にもアシリコイトヒラにも家を持ち、主にタラ釣りをしており、夏はノリ、冬はタラ釣りを生計を立てていました。



この木挽は、丸太を角材などに加工する道具で、お父さんは、何軒もの家を建てました。ビョーノツの家もアシリコイトヒラの家も、お父さんがこの木挽を使って建てたもので、特にビョーノツの家はノリの乾燥場を併設した大きな建物で、奥には寝起きする場所があつて、乾燥場でご飯を食べていたそうです。お父さんは自分で家を建てたほか、ソ連軍侵攻後にはロシア人に頼まれて馬の蹄鉄を作るなど、とても器用な方でした。

引き揚げは昭和二十三年の十月で、この木挽は布団の中に隠して持ち出しました。

大きな木挽も使っていましたが、布団の中に隠せないため、持ち出すことはかえりませんでした。引き揚げ時には手荷物の個数制限はありませんでしたが、船に荷物を積み込む際にモッコの隙間からぼろぼろと荷物が落ちてしまい、いくつもの荷物がなくなってしまうました。幸いにも、この木挽は残った荷物の中になりました。引き揚げ後にはお父さんの実家を頼って秋田県に移り住みましたが、そちらでの家も、この木挽でお父さんが建てたものでした。

お父さんはこの木挽をととても大切にしていたので、光作さんも幾度の引っ越しの度にも捨てたりはせず、お父さんの思い出の品として大切に保管されているそうです。



お爺さんのトランク

色丹島出身の中田 勇さん

中田勇さん一家は色丹島斜古丹に住んでいました。

お爺さんは中田葎次郎（よしじろう）さん、お父さんは吉顕さん、お母さんはキヌさん、次男の勇さんきょうだい七人の十人家族で、終戦の時、勇さんは十七歳でした。

このゼニガタアザラシの皮でつくられたトランクは、お父さんの吉顕さんが色丹島で獲ったアザラシの皮を根室でなめして、函館に送りトランクに加工したもので、昭和の初めに作られた

ものではないかということ、当時としては相当贅沢な物だったと思われるということです。

このトランクは、お爺さんが金庫がわりとして使っていたそうで、昭和二十年八月の根室空襲で根室の家が壊れた時に、お爺さんが一緒に島に渡ったり、昭和二十二年十一月に樺太經由で函館に引き揚げてきた時にも、お爺さんが大事な証書などを入れ大切に持ってこられたそうで、その後、吉顕さん、勇さんと三代に渡り引き継がれている大切な思い出の品とのことです。

勇さんは、島にある実家から学校までの距離が二十キロメートルも離れていたため、根室で隠居していたお爺さんの家から、根室の学校に通っていたそうです。

お爺さんは、色丹島で軍馬用の馬を七十頭も飼育していたほか、東旭川に十七ヘクタールの水田をかうなど幅広く事業をされていたので、両親は島で漁師をしていたので、勇さんは夏休みなどには島に行っていたそうで

終戦後、ソ連軍が侵攻し、勇さんの家の納屋にもロシア兵が入ってきたので、逃げも隠れもできなくなり、二年間一緒に生活したそうです。

